

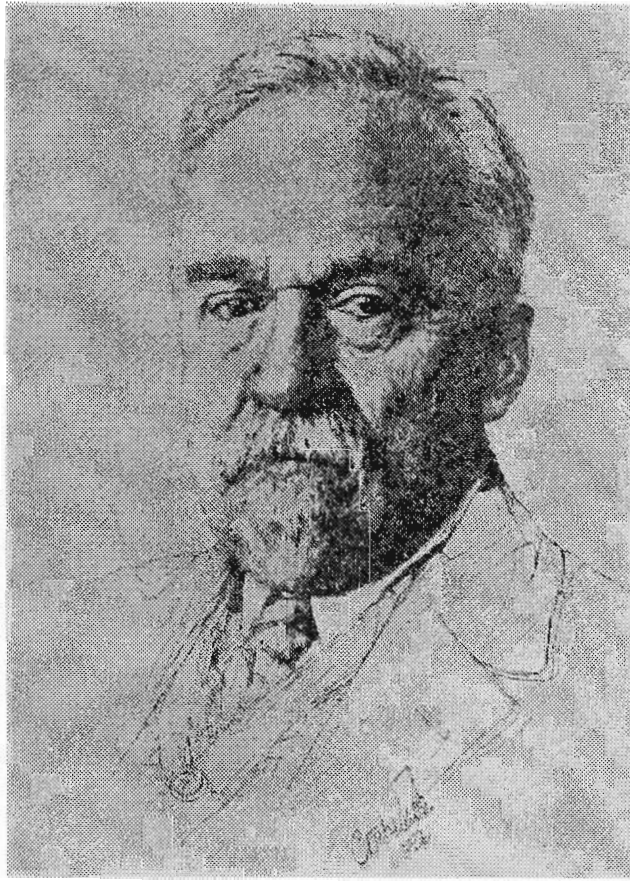
▲シユスキソ教授を憶ふ

——教授の學的功績——

舊北區鳥類の權威として最近のうちまで多くの新發

1107 (207)

見の論文を發表されたシユスキン博士(P. P. Sushkin)が苟且の病を得て去年九月十七日コーカサスに於て肺炎の爲めに敢へなく死去された。我鳥學會は數多くの



第卅九圖 故シユスキン教授
Fig. 39. The late Prof. P. P. Sushkin.

學に對し大なる興味を持つて居た。モスコウ大學を卒業するまでの内彼の發表した處女論文は、モスコウより蒙古に連る廣大なる土地の鳥類に就てであつた。露國革命中はクリミヤに亡命して、其の地の大學教授として數年を勤めて居つた。一九二一年、レニングラードのアカデミー、オブ、サイエンス(民衆生物博物館)に出勤して居つた。程なくメンバー、オヴ、アカデミーなる最高の學位を授與された。亡命の身にあつた彼はアルタイ山、蒙古及シベリヤ地方に探險旅行を試みた。彼の腦裡には生物地理學の問題が多く展開されて居つて、舊北區鳥類の起源に就て最も多くの興味をひかれて居つた。

Considerations sur l'histoire de la faune de

l'Asie paléarctique. Bul. Soc. Nat. Moscou 31,

1923, pp. 32-41 (2nd pagination). (In Russian.)

權威ある學者の内とりわけ彼を失つたことを最も痛切に嘆く次第である。未だ齡六十、前途に幾多の有益な研究を残されたであらう。彼は幼年時代より夙に自然科

On zoological regions of Central Siberia

20

and of the nearest parts of High Asia with some contributions to the history of the fauna of Palae-

On the anatomy and classification of the Weaver-Birds. Bull. Amer. Mus. N. H. New York,

arctic Asia. Bul. Soc. Na. Sect. Biol. Moscou, 34,

57, 1927, pp. 1-32, 18 figs.

1925, pp. 7-86. (Russian, no res.)

一九一八年には米國鳥學會名譽會員、一九二四年に

もとより彼の生物全般に對する智識は其の造詣極めて深く、蝶類も研究されて居た。過去數年間に於いては人類起源の問題を追究し、それが中央亞細亞の山嶽地方に發祥したといふ説を語られたことがあつた。

は英國鳥學會の名譽會員に推薦された。彼が一九二五年にアメリカに渡つたとき數多くの舊北區の鳥類の亞種を發表したときは、その當時アメリカ人誰の胸裡にも燈臺下暗しの感を抱かしめたことであらう。其の時樺太の北アヲジの學名を發表された。余は本誌千九百

一九二四年及び五年には歐米諸國を歴訪し、ロンドンに於て鷹司公及び余は初めて面識の機を得たのである。その當時彼の發表した論文で最も注意をひいたのは、雀科の鳥類とアフリカのウイバー鳥とは同一科に入るべきで、獨立の科に分ける價值のないと言ふ發表で、彼の分類は重に頭部の *Folli palatae* に就てゝあ

廿五年二九七頁上に於いて豫告的に其の存在を認めぬこと發表して居る。彼は一九二七年にはルリカケスの近似種に就て面白い記事をアイビス紙上に發表した。それによるとアメリカに産する、カケスの一種はルリカケスに近いことを論じて居るが、之れは最初の着眼

と云はなければならぬ。

On the affinities of *Lalocitta*. Ibis, London, 1927,
pp. 518-522; Bull. B. O. C., Nov. 1924.

之は一例に過ぎないが彼を知るものは皆様に彼の舊北區鳥類と北米のそれとの相互關係の研究、其の新舊兩區に産するものの Affinity を研究した學的功績を認めて居る。此の問題に關する彼の研究は世俗的には惠まれなかつたが權威ある彼の學的生活の最後を飾るものである。去年の初に發表した *Parapavo californicus*, *Agriocharis* との骨格的關係の近きことはカリホルニヤ Pleistocene の土壤より出た前者の骨は舊北區の雉類に近いことを證明するものである、と言ふ。これは未だ誰も取扱つたことのない問題であつて、彼は馬等に見られるが如き東洋よりアルーシャン海峽を渡つて米國に入つた鳥類を證明したい、と語られたこ

とがあつた。

こゝに掲げたシユスキン教授の肖像は本誌の爲め未亡人より贈られたものである。彼の死後間もなくレニングラードに於ける彼の住みなれたアパートメントは忽ち赤露人の爲めに無慘にも破壊せられ、すべての品物は盗み去られてしまつた。その内には未發表の貴重論文が數多くあつたそうである。

彼の晩年は全く同情に堪へない程我々異邦人の目には不幸なものであつた。米國では夙に彼の明晰な頭腦の働を認めて居つて、一九二五年渡米の時、教授夫妻の米國に永住されんことを博物館關係の人々から勧めたのであつたが、シユスキンは、それではアカデミー、オブ、サイエンスを如何して下さるか、と應へたと言ふ。

彼の母國を愛し、その革命騒亂の内に介在して學問

の爲めに學問を追求して止まなかつた態度は實に勇敢の至りと稱せねばなるまい。彼の死は獨り露國のみならず汎く世界學界及び彼と友交ありしもの、均しく痛嘆して止まない所である。(蜂須賀)

▲故リジユウェー氏

鳥學に志すものは獨り北米人に限らず常にリジユウェー氏 (Robert Ridgway) の名及び鳥名に附せられたる氏の名は聞きなれたものであろう。夫程同氏は世界的鳥學者として驍名天下に布く知られて居る。今氏を失つたのは實に米國鳥學界の損失のみに止まらず全世界の斯學の發展の爲め誠に惜みても餘りあることである。

氏は一八五〇年七月二日北米イリノイ州マウン
ト、カーメルに於て生れ本年(一九二九)三月二十五
日イリノイ州オルネイの自宅に於て七十九歳で逝去さ

れた。氏の論文は一八六九年を始めとし一九二七年に至る迄實に五百四十編の多きに及んでゐる。此點を見ても如何に絶大なる努力が鳥學研究に盡されたかを知



第四十圖 故ロバート、リジユウェー氏
Fig.40. The late Mr. Robert Ridgway.
(From the "Condor" for 1928).

ることが出来よう。之等五百數十餘の論文中主なる著
書を書き抜けば